

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
7547	大正2年	冬の部	雪雲の一重雨雲の八重春近き	春近し	時候
7548	大正2年	冬の部	名残焼く粃穀の阜春隣	春近し	時候
7550	大正2年	冬の部	さながらに雪道作れ下部ども	雪	天文
7669	大正2年	冬の部	はつあられ菊の奴を鞭ちぬ	霰	天文
7671	大正2年	冬の部	さゝ鳴や神に誓ひし面晴れ	笹鳴	動物
7673	大正2年	冬の部	水の低きに就く音とさゝ鳴と	笹鳴	動物
7674	大正2年	冬の部	伐木に戸寒し昔の頭巾思ふ	頭巾	人事
7675	大正2年	冬の部	雷鳴のこれを名残か蕪引	蕪引	人事
7676	大正2年	冬の部	草摺り木しぼり尽きて水涸れ / \	水涸	天文
7677	大正2年	冬の部	冬山に國見す樹を伴石を侶	冬山	天文
7752	大正3年	冬の部	話柄又薫染の事さゝ鳴て	笹鳴	動物
7754	大正3年	冬の部	枯菊の句もなし雪に埋もれ泣く	雪	天文
7833	大正5年	冬の部	風呂吹の味噌を點ずる第一義	風呂吹	人事
7834	大正5年	冬の部	大晴れの烟となりぬ冬の水	冬の水	天文
7835	大正5年	冬の部	寒の雨に老木の腕潤へり	寒の雨	天文
7836	大正5年	冬の部	この凍に酔人と道に別れけり	凍る	天文
7837	大正5年	冬の部	土掘れバ物の根切らる夕しぐれ	時雨	天文
7838	大正5年	冬の部	冬枯や尚鋤下ろす土の友	冬枯	植物
7839	大正5年	冬の部	和韻至る硯池の氷解にけり	氷	天文
7841	大正5年	冬の部	新涼の目に澄み耳に徹りけり	新涼	時候
7842	大正5年	冬の部	寒の晴やまこと獸の穴にして	寒晴	天文
7843	大正5年	冬の部	晝餉最中に獸狩の関の声 (冬籠)	狩	人事
7844	大正5年	冬の部	夜学出て一尺の雪に呼びかはす (山家)	雪	天文
7845	大正5年	冬の部	門に立つ我が放心よ三十三才	鷓鴣	動物
7846	大正5年	冬の部	早起枯菊を焚く我寒に入る	寒の入	時候
7847	大正5年	冬の部	一ところの雲明り冬木立かな	冬木	植物
7848	大正5年	冬の部	狐見ゆたま / \ 大寒の靄ゆうべ	大寒	時候
7849	大正5年	冬の部	書樓より隣の干菜見る久し	干菜	人事
7850	大正5年	冬の部	沈思より起てバ冬木の怖ろしき	冬木	植物
7851	大正5年	冬の部	氷餅につく雀追へバ日昇る	氷餅	人事
7852	大正5年	冬の部	画賛の句を想ふ庭の枯柳	枯柳	植物
7853	大正5年	冬の部	書樓下る毎に北風の音す也	北風	天文
7854	大正5年	冬の部	画幅巻いて商人辞去す枯柳	枯柳	植物
7855	大正5年	冬の部	北風の屋鳴り画賛の筆を措く	北風	天文
7857	大正5年	冬の部	長辰宮南に暗き椿かな	椿	植物
7859	大正5年	冬の部	風邪の夢に南朝の古蹟冬されし	冬ざれ	時候
7860	大正5年	冬の部	薪足る積嵩や鷓鴣鳴く	鷓鴣	動物
7861	大正5年	冬の部	大寒や夕晴の山の彼方海	大寒	時候
7862	大正5年	冬の部	風邪に臥して土うつ寒の雨をさく	寒の雨	天文
7863	大正5年	冬の部	土玄し北國希有に雪ふらぬ	雪	天文
7864	大正5年	冬の部	病起一朝の雪の深さを行く	雪	天文
7865	大正5年	冬の部	氷餅吊す夜や谿川の水の音	氷餅	人事
7866	大正5年	冬の部	潜む魚に氷砕くや日昇る	氷	天文
7867	大正5年	冬の部	晝櫓火に傳家刀見る機会哉	櫓	人事
7868	大正5年	冬の部	日暄かに一炉根櫓の燃え尽きず	櫓	人事
7869	大正5年	冬の部	高山を後ろに推す雪舟の疾き	雪舟	人事
7870	大正5年	冬の部	夜学又大勢となりぬ積る雪	雪	天文
7871	大正5年	冬の部	春近き消息や硯池乾きけり	春近し	時候

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
7872	大正5年	冬の部	難解の書を讀了へぬ春隣	春近し	時候
7873	大正5年	冬の部	山脈の雪に書樓の起居かな	雪	天文
7874	大正5年	冬の部	炭竈の一時冬日正面なる	冬日	天文
7875	大正5年	冬の部	冬日落ちゆくに尚斧揮ふあり	冬日	天文
8031	大正5年	冬の部	草鞋の泥乾くまもなし栗落葉	落葉	植物
8032	大正5年	冬の部	朽葉ふみゆけバ菊の黄活きてあり	朽葉	植物
8033	大正5年	冬の部	書樓日々木葉掃出す三五片	落葉	植物
8034	大正5年	冬の部	書出シをかゝねばならぬ日の暮るゝ	掛乞	人事
8035	大正5年	冬の部	吾庭にのみあり芭蕉枯れにけり	枯芭蕉	植物
8036	大正5年	冬の部	山郭や我は顔なる干大根	干大根	人事
8037	大正5年	冬の部	霜朝日障子の中に泣く乳児よ	霜	天文
8038	大正5年	冬の部	莢開いて豆自から落つ達磨の忌	達磨忌	人事
8040	大正5年	冬の部	遠山の雪看る市の蜜柑かな	雪	天文
8041	大正5年	冬の部	遠山の雪耀けり一架の書	雪	天文
8042	大正5年	冬の部	鷹凜々雪尖る北方の山	雪	天文
8043	大正5年	冬の部	雪疊む山遠し大河日に潤るゝ	雪	天文
8044	大正5年	冬の部	玻璃窓の曇拭へり庭冬木	冬木	植物
8045	大正5年	冬の部	海底へ冬雷の失せにけり	冬雷	天文
8046	大正5年	冬の部	机一つ蔵書さてなし煤拂	煤拂	人事
8047	大正5年	冬の部	すゝの日や到來の柑子端近な	煤拂	人事
8048	大正5年	冬の部	子等が頬いよ / \ 紅し年の暮	年の暮	時候
8049	大正5年	冬の部	鬢斜に燭寒し海鳥の鳴く	寒さ	時候
8050	大正5年	冬の部	曲闕れバ冬木原又風の吹く	冬木	植物
8058	大正6年	冬の部	河に臨むて氷堅きを信じけり	氷	天文
8059	大正6年	冬の部	漁夫の群大きくなりぬ厚氷	氷	天文
8062	大正6年	冬の部	吹雪ぬくや我が肺腸のもゆる音	吹雪	天文
8063	大正6年	冬の部	高樅を楯に家栖む冬日かな	冬の日	時候
8064	大正6年	冬の部	泣きやまぬ兒に吹雪婆の驚破來る	吹雪	天文
8065	大正6年	冬の部	青空を見るうれしさよ屋根の雪	雪	天文
8066	大正6年	冬の部	朝な / \ 雪道踏むや山遠き	雪	天文
8067	大正6年	冬の部	大雪に露はなる我頭かな	雪	天文
8068	大正6年	冬の部	日景通ふ雪に埋れて鶏の鳴く	雪	天文
8069	大正6年	冬の部	雀の如ふくらみて雪の人の來る	雪	天文
8070	大正6年	冬の部	閑話良久し屢々垂氷落つ	垂氷	天文
8071	大正6年	冬の部	村文庫へ雪沓の痕新らしき	雪沓	人事
8072	大正6年	冬の部	門札の我名見古りぬ枯柳	枯柳	植物
8073	大正6年	冬の部	磧より炭竈の烟見上げたり	炭がま	人事
8075	大正6年	冬の部	青空を見る偶々や冬の水	冬の水	天文
8076	大正6年	冬の部	凍霧の中夜明の瀬鳴り高まさる	凍霧	天文
8077	大正6年	冬の部	屋根の雪おろす本堂鳴ひゞく	雪下し	人事
8190	大正6年	冬の部	初冬の雲に壓さるゝ小村哉	初冬	時候
8191	大正6年	冬の部	常盤木に神鎮まるや玉霰	霰	天文
8192	大正6年	冬の部	雑穀地にこぼれ霰雲の飛ぶ	霰	天文
8193	大正6年	冬の部	霰急渡りおくれし藪小鳥	霰	天文
8194	大正6年	冬の部	廬を出てゝ古人に似たる時雨哉	時雨	天文
8195	大正6年	冬の部	獨ゆく我に木葉のふることよ	木葉	植物
8197	大正6年	冬の部	ゆく春のことというて山を下りけり	行春	時候
8199	大正6年	冬の部	輕寒と怕る眉目や小六月	小春	時候

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
8200	大正6年	冬の部	雪の笹に馬遊バすや事始	事始	人事
8201	大正6年	冬の部	鮭さげし人にゆづりぬ落葉道	落葉	植物
8204	大正6年	冬の部	雀飢ゑて軒を離れず枯柳	枯柳	植物
8206	大正6年	冬の部	天高地厚菊もろ / \ の影	菊	植物
8207	大正6年	冬の部	賢といはむ菊に仕へて樂める	菊	植物
8209	大正6年	冬の部	枝を擇む悲しき鳥や冬木立	冬木	植物
8217	大正7年	冬の部	群木は雪にうもれて松と我	雪	天文
8218	大正7年	冬の部	釜の湯の徒に沸騰す吹雪哉	吹雪	天文
8219	大正7年	冬の部	雪の城垂氷の砦書に籠る	雑	雑
8220	大正7年	冬の部	我が蒲團の裾邊萬國地圖掛る	蒲團	人事
8221	大正7年	冬の部	この雪の下に青菜の偃しあらむ	雪	天文
8222	大正7年	冬の部	風邪去らぬ頭冬川に臨みけり	冬川	天文
8223	大正7年	冬の部	今朝も掃かれず障子の羽虫いつ凍てし	凍る	天文
8224	大正7年	冬の部	冬川に明るき樹影帆影哉	冬川	天文
8225	大正7年	冬の部	産土神の杉を力や雪の中	雪	天文
8226	大正7年	冬の部	凍霧晴に人々の晴耀けり	凍霧	天文
8227	大正7年	冬の部	樹々骨の如く凍霧裂けて飛ぶ	凍霧	天文
8228	大正7年	冬の部	朝日充ちて蒼空に凍霧消えゆけり	凍霧	天文
8229	大正7年	冬の部	雪凍てし響あり稀に行く人に	雪	天文
8230	大正7年	冬の部	雪沓の又しも足に合はぬかな	雪沓	人事
8373	大正7年	冬の部	木葉飛ぶ頻に谷の水騒ぐ	木葉	植物
8374	大正7年	冬の部	神儼に杜にいますや散紅葉	散紅葉	植物
8375	大正7年	冬の部	竹伐て紅葉大方ちらしけり	散紅葉	植物
8376	大正7年	冬の部	新嘗のたなつもの紅葉散はゆる	散紅葉	植物
8377	大正7年	冬の部	人并に干菜釣得て妻のあり	干菜	人事
8378	大正7年	冬の部	かの母も子等が需むる胼薬	皸	人事
8380	大正7年	冬の部	枯野ゆくまがつひ何に潜みたる	枯野	天文
8382	大正7年	冬の部	いかなれバ物狂はしう霰うつ	霰	天文
8384	大正7年	冬の部	行年や尚あり / \ と天の川	行年	時候
8385	大正7年	冬の部	日短く師走の空の窄まりぬ	師走	時候
8386	大正7年	冬の部	少間に只山を見つ年の暮	年の暮	時候
8387	大正7年	冬の部	或日獨書齋の煤を拂ひけり	煤拂	人事
8388	大正7年	冬の部	足跡もなき鎮守の雪や札納	札納	人事
8389	大正7年	冬の部	行年の一日の晴を惜みけり	行年	時候
8390	大正7年	冬の部	大方の人に咎なし年忘	年忘	人事
8391	大正7年	冬の部	年尽るまで枯菊を守りけり	枯菊	植物
8392	大正7年	冬の部	書出シ配り終へて主人澹如たり	掛乞	人事
8393	大正7年	冬の部	子等が歌ふこん / \ 霰年暮るゝ	年の暮	時候
8395	大正7年	冬の部	この寒さ温石いかにし給ひし	温石	人事
8405	大正8年	冬の部	飴笹のひたからびけり冬籠	冬籠	人事
8407	大正8年	冬の部	春立つや衣裳好みの甲斐 / \ し	立春	時候
8408	大正8年	冬の部	霜柱ゆく / \ 筑波遙かなり	霜柱	天文
8409	大正8年	冬の部	魚ハ淵に潜みて久し霜柱	霜柱	天文
8410	大正8年	冬の部	霜柱の中に去來が墓石哉	霜柱	天文
8411	大正8年	冬の部	丈山の足跡見よや霜柱	霜柱	天文
8412	大正8年	冬の部	松間を僧俗二人霜柱	霜柱	天文
8413	大正8年	冬の部	霜柱金色堂は鎖されて	霜柱	天文
8414	大正8年	冬の部	武蔵野の芒残りぬ霜柱	霜柱	天文

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
8415	大正8年	冬の部	霜柱寒雁鳴いて渡りけり	霜柱	天文
8416	大正8年	冬の部	霜柱例の針子が小風呂敷	霜柱	天文
8417	大正8年	冬の部	霜柱水暖かに流れけり	霜柱	天文
8577	大正8年	冬の部	巖すべりて水に流るゝちり紅葉	散紅葉	植物
8578	大正8年	冬の部	落葉深く靱磨奥に聞ゆ也	落葉	植物
8579	大正8年	冬の部	早起の子等踏みてをり今朝落葉	落葉	植物
8580	大正8年	冬の部	大川に沿うてあるきぬ日短く	短日	時候
8581	大正8年	冬の部	落葉ふむで夜も行かふ隣どち	落葉	植物
8582	大正8年	冬の部	日の中に木葉ふり / \ 静まりぬ	木葉	植物
8583	大正8年	冬の部	霜ながら物皆朝を動きつゝ	霜	天文
8585	大正8年	冬の部	この山をしぐれて帰る湖の人	時雨	天文
8586	大正8年	冬の部	草錦霰消ゆるに降りそゝぐ	霰	天文
8587	大正8年	冬の部	水槽の底へ木葉や一時雨	木葉	植物
8588	大正8年	冬の部	麦蒔の晝餉や海の鳥來鳴く	麦蒔	人事
8589	大正8年	冬の部	麦蒔に霜の兆の天青し	麦蒔	人事
8590	大正8年	冬の部	麦蒔人心無げやな草の花	麦蒔	人事
8591	大正8年	冬の部	麦を蒔く土軟かや雁稀に	麦蒔	人事
8592	大正8年	冬の部	我糧の麦蒔く夫婦憩ひけり	麦蒔	人事
8593	大正8年	冬の部	風掃くや麦蒔き終へし土と人	麦蒔	人事
8594	大正8年	冬の部	麦蒔の短日土の黒き哉	麦蒔	人事
8595	大正8年	冬の部	麦蒔の藁灰飛ぶや風曇り	麦蒔	人事
8596	大正8年	冬の部	麦蒔に遅き日出でゝぬくさ哉	麦蒔	人事
8597	大正8年	冬の部	凧の下に麦蒔しづまりぬ	麦蒔	人事
8598	大正8年	冬の部	北國の麦蒔日和称へけり	麦蒔	人事
8600	大正8年	冬の部	風呂吹の湯氣の中より宣はく	風呂吹	人事
8610	大正9年	冬の部	未了寒し決定の時尚寒し	寒さ	時候
8611	大正9年	冬の部	雪舞ふや鴛鴦見失ふ水の隈	雪	天文
8612	大正9年	冬の部	篋の雪に朝茶の煙かな	雪	天文
8613	大正9年	冬の部	雪ちるや神の泉の苔の上	雪	天文
8614	大正9年	冬の部	湖照るや松のあはひの比良の雪	雪	天文
8615	大正9年	冬の部	曉天の第一砲や雪の山	雪山	天文
8616	大正9年	冬の部	鷹飛ぶや峯の雪ふむ旅の者	雪	天文
8617	大正9年	冬の部	薄雪や梅の在所の道普請	雪	天文
8618	大正9年	冬の部	日色なし雪に聳ゆる雪の山	雪	天文
8619	大正9年	冬の部	簾外の雪に小櫓や歌舞の町	雪	天文
8620	大正9年	冬の部	かれ / \ し芒に雪の小鳥哉	雪	天文
8621	大正9年	冬の部	神木にはや道絶えし深雪かな	雪	天文
8622	大正9年	冬の部	古椿雪暖かにすべりけり	雪	天文
8624	大正9年	冬の部	言靈の鶯の春をも待たず	春待	時候
8626	大正9年	冬の部	可憐綺夢驚いてこたつ冷ゆ	炬燵	人事
8627	大正9年	冬の部	蒲團去ればこたつの骸古びたり	炬燵	人事
8628	大正9年	冬の部	我と老いぬこたつ蒲團の蝶鳥も	炬燵	人事
8629	大正9年	冬の部	こたつ出て狩に行く人見送りぬ	炬燵	人事
8630	大正9年	冬の部	こたつして曾遊遠き思かな	炬燵	人事
8631	大正9年	冬の部	置こたつ故人遠く寄す吉野の句	炬燵	人事
8632	大正9年	冬の部	蠅生きてこたつ蒲團の香に漂ふ	炬燵	人事
8633	大正9年	冬の部	こたつ知らぬ老の僕ぞ何にゆく	炬燵	人事
8634	大正9年	冬の部	こたつ蒲團の裾辺玩具の鳥獸	炬燵	人事

No.	作句年	部	俳句	季語	分類
8635	大正9年	冬の部	こたつ蒲團の香を吐く雪の小庭哉	炬燵	人事
8750	大正9年	冬の部	物潜みつくして落葉静まりぬ	落葉	植物
8751	大正9年	冬の部	我と共に落葉ふみ行く人もなし	落葉	植物
8752	大正9年	冬の部	日暮るゝに落葉掃残す一樹哉	落葉	植物
8754	大正9年	冬の部	詩書堆裏兒等橙を遊ぶ	橙	植物
8912	大正10年	冬の部	風吹けバ物の悲しき釣干菜	干菜	人事
8913	大正10年	冬の部	物の緒の枯木に絡む鷹野哉	枯木	植物
8921	大正11年	冬の部	鳥寒くさかしまに落つ壑の底	寒さ	時候
8922	大正11年	冬の部	冬雲の明るき處なかりけり	冬の雲	天文
8923	大正11年	冬の部	冬雲と流るゝ茶毘の煙哉	冬の雲	天文
8924	大正11年	冬の部	人々も柩も一時吹雪哉	吹雪	天文
8925	大正11年	冬の部	いつち行きし我子や冬木そゝり立つ	冬木	植物
9102	大正11年	冬の部	武蔵野の冬菜所や富士白し	冬菜	植物
9103	大正11年	冬の部	武蔵野の霜に面を曬しけり	霜	天文
9105	大正11年	冬の部	岩山に凍えし鳥と見ゆる哉	凍る	天文
9106	大正11年	冬の部	川涸れて生物何に潜みけむ	川涸	天文
9108	大正11年	冬の部	筆硯を凍てさせじとす冬籠	冬籠	人事
9110	大正11年	冬の部	折ふしハ冬至近き日さす故に	冬至	時候
9111	大正11年	冬の部	曼陀羅を後ろに落葉踏去りぬ	落葉	植物
9112	大正11年	冬の部	落葉踏むこと良久し富士見ゆる	落葉	植物
9113	大正11年	冬の部	岩山に吹きも溜らぬ落葉哉	落葉	植物
9114	大正11年	冬の部	東京より歸れば落葉庭を埋む	落葉	植物
9115	大正11年	冬の部	谿落葉くゞり来て水明かに	落葉	植物
9116	大正11年	冬の部	桑の何の五畝の落葉のつもるまゝ	落葉	植物
9117	大正11年	冬の部	落葉焚きし烟うすれてたそがるゝ	落葉	植物
9118	大正11年	冬の部	落葉かけバ水自から流れけり	落葉	植物
9119	大正11年	冬の部	庭もせの落葉静まる月夜哉	落葉	植物
9120	大正11年	冬の部	日中は人も落葉も騒がしき	落葉	植物
9121	大正11年	冬の部	水際の葦四五本や鴨遊ぶ	鴨	動物
9122	大正11年	冬の部	水鳥の飛ぶ颯爽と水の上	水鳥	動物
9123	大正11年	冬の部	この頃の悲しき色や冬の雲	冬の雲	天文
9124	大正11年	冬の部	冬構ガラスの明り頼もしき	冬構	人事